

## 日本 Bangladesh 協会の皆様へ

## ■ 目次

\*目次の見出しをクリックして頂ければ、直ちに本文に移ります。

## ■ 1) 巻頭言: 『ノズルルの故郷チュルリヤ村』

東京外国語大学大学院教授

元理事 丹羽京子

## ■ 2) 現地便り: 『カチプール・メグナ・グムティ橋第 2 橋建設および既存橋改修事業について』

(株)大林組ジャムナ JV 工事事務所 所長

川崎 隆

## ■ 3) 会員寄稿: 『就学前教育からみる Bangladesh の教育熱』

名古屋女子大学 講師

門松愛

## ■ 4) 会員寄稿: 『Bangladesh の人々にとってボンゴボンデウとは?』

—ムジブル・ラーマン生誕 100 周年シリーズ No. 12(完)—

元理事 渡辺一弘

## ■ 5) 理事連載: 『Bangladesh の独立に寄りそう(1970 年 12 月):

パキスタン総選挙と中国をめぐる動き』

—Bangladesh 独立・国交 50 周年記念シリーズ No. 6—

理事 太田清和

## ■ 6) 『事務連絡』

## ■ 1) 巻頭言: 『ノズルルの故郷チュルリヤ村』

東京外国語大学大学院教授

元理事 丹羽京子

## チュルリヤ村

数年前、わたしは念願だったある場所を訪れた。インド、西ベンガル州ボルドマン県チュルリヤ村。今日では Bangladesh の国民詩人とも言われるカジ・ノズルル・イスラムの生地である。コルカタのハウラ駅から北西に向かう列車に 3 時間ほど乗るとアサンソールという町に着く。チュルリヤ村へはここからバスで行くしかない。一日に 2,3 本しかないバスである。点々と続くボタ山をぼんやり眺めながら 1 時間以上もバスに乗っていただろうか、やっとチュルリヤ村に到着する。なんの変哲もない村、と言えどもそれまでだが、美しいベンガルの農村を見慣れたものにとっては寂れている感が否めない。この旅につきあってくれたジャドプル大学の若き研究者 A 君が、「このあたりもだいぶ豊かになってきて…」と話し始めると、通りがかりの村人が「どこが豊かだ、裏通りを見たか、裏通りを!ここは貧しい村なんだ!」と怒ったように言い放ってすたすたと行ってしまった。

## 若き日のノズル

ノズルルが生まれたころ(1899年)のこの村については知る由もないが、ノズルル自身は間違いなく貧しい家の生まれであった。生まれた子どもに次々と先立たれて悲観した父親からノズルルは「ドゥッコ(不幸)」などという呼び名を与えられ、そしてその父親もノズルル 9 歳のときに亡くなってしまっている。イスラム教徒の子どもとしてモクトブ(イスラム式の初等学校)に通っていたものの、父の死後学業は中断、ノズルルは叔父に誘われてレトと呼ばれる地元の旅芸人の一座に加わった。レトの出し物の中心は、二人の歌手が即興で歌の勝負をするという趣向のコビガーンだったようで、このコビガーンは、かつてはベンガル全土で盛んに行われ、祭りなどには欠かせないものであった。ノズルルはこのレトでたちまち頭角を顕し、ほどなくリーダーであった叔父が亡くなると 10 歳そこそこにしてリードシンガーとして活躍した。才気活発で相手を完膚なきまでにやりこめたというエピソードも伝わっているが、当時は「キショル・コビ(子ども詩人)」と呼ばれ、地元では知られた存在だったらしい。

しかし 20 世紀にはいると、レトそのものが廃れていく。ノズルル自身もさらなる勉学への希望を捨てておらず、12 歳から 18 歳までの間、あるときは篤志家の援助を得、あるときは奨学金を得、またあるときはレトに戻り、あるいはアサンソールの軽食屋で働いて生活費を稼ぎつつ、そして何度も転校をして高校卒業間近までこぎつける。しかしここで、ノズルルは最後の試験を受けずにベンガル連隊に参加してしまう。ときは 1917 年、第一次世界大戦さ中である。この決断には終生ノズルルに付きまとった経済問題が大きく作用していると思われるが、第一次世界大戦時にはまだイギリスに協力し、戦後に自治を手に入れようという機運が濃厚だったこととも無関係ではないだろう。

## 時代の寵児へ

軍隊時代のノズルルはそのほとんどをカラチで過ごす。カラチ時代、ノズルルはウルドゥー語やペルシャ語に磨きをかけ、ガザル(アラブもしくはペルシャから伝わった詩形。ウルドゥーでは盛んに行われていた)や古典音楽を学び、はたまたま愛国歌を作って披露し、短編小説を書けば「ベンガリ・ムスリム文学」(ベンガリ・ムスリム文学協会を母体とする刊行物。協会は当時、ベンガリ・ムスリムの数少ない文学活動の拠点であった)に投稿したりしているので、結果的にこの時期にその後の文学的あるいは音楽的キャリアの基礎を築いたとも言える。そして 1920 年、連隊解散後にノズルルが向かったのは、「ベンガリ・ムスリム文学」編集部のあったコルカタであった。ノズルルはその編集長にしてインド共産党の主要メンバーでもあったムザッファル・アーマドと意気投合し、しばらく事務所に同居して本格的に文学活動に取り組むようになる。翌年の引っ越し先(コルカタ市内)でもムザッファル・アーマドと同居。そしてまさにこの家で、21 年の暮れ、不世出の作品「反逆者(Bidrohi)」が書かれるのである。「反逆者」は一世を風靡し、ノズルルは一躍時代の寵児となる。

## 闇に閉ざされて

このあとのノズルルの劇的な人生を辿る余裕はここにはない。自由闊達に自らの信じることを表現するノズルルは当局から危険人物とみなされ、投獄もされた。私生活ではヒンドゥー教徒であるプロミラと結婚し、コミュニティー内でも孤立を経験した。しかしノズルルの勢いはとどまるどころを知らず、30 年代になるとその歌が人気を呼び、インドに進出したばかりの HMV と契約して、人生初めての大金を手にしたりもしている。

しかしこの絶頂期は長くは続かなかった。ノズルルに大きなモティベーションをもたらしていた長男ブルブルがわずか 3 歳で亡くなると、ノズルルの精神的バランスは急速に危うくなっていく。そしてそれから数年後、今度は妻のプロミラが病に倒れると経済的にも精神的にもノズルルは追い詰められていき、ほどなく完全に精神の安定を失ってしまったのだ。

このあとノズルルは三十数年間、のちに精神分裂病ともピック症とも診断された状態で過ごす。第二次世界大戦や分離独立もあり、一家はますます困窮していったのだが、1972 年、前年に独立を果たしたバングラデシュ政府に招かれダッカに居を移すことになる。ノズルル本人はおそらくバングラデシュ誕生を理解してはいなかったろうが、ここで手厚い看護のもとその最晩年を過ごし、76 年に亡くなったのだ。

## ノズルルを探して

ノズルルの過去を辿る際に立ち足るの壁が資料不足の壁である。英領時代に出されたノズルルの詩集や冊子はほぼすべてが発売禁止の憂き目に遭っており、分離独立以前はきちんと保存できる状況にはなかったうえに、歌に関してもノズルルは当時保持していたすべての著作権をプロミラの治療費にあてるために売り払ってしまっている。またそもそもその初期においては「要注意人物」であったノズルルの名前をレコード会社がクレジットするのを嫌い、その名は刻まれていない。ノズルルの名を冠することが解禁されたのちのものに関しても、当時の記録が残っていないありさまだ。

ダッカには立派なノズルル・インスティテュートが存在するが、それほどめばしい資料がないのは、そうした事情による。また、ノズルルはその活動時期のほとんどをコルカタで過ごしているが、インド側での研究は盛んとは言い難い。冒頭のチュルリヤ村にはノズルルの生家を改造したノズルル・アカデミーと称する建物があるが、その所蔵品は目を蔽いたくなるほどの乏しさである。チュルリヤに同行してくれた A 君はアサンソールにあるノズルルが働いていたという軽食屋にも案内してくれたが、そこで働くものはだれもその事実を知らなかった。アサンソール出身の A 君は「ノズルルはもともとこちらの人間なのに、すっかりバングラデシュの詩人みたいになってしまって…」と悔しがることしきりである。

ノズルル自身とは言えば、ベンガル連隊から除隊した 20 歳のときにチュルリヤ村を訪れたのが最後であったという。ノズルルは母とも折り合いが悪かったのか、ほとんど会おうとしていない。人気のないチュルリヤ村に佇んで、ここを出て行ったノズルルに思いを馳せる。村を出てコルカタで名を馳せたノズルルはけっしてうしろを振り返ろうとしなかった。そしてそこからさらにどこまでも遠い所へ行ってしまったかのようである。

## ■2) 現地便り:『カチプール・メグナ・グムティ橋第 2 橋建設および既存橋改修事業について』

(株)大林組ジャムナ JV 工事事務所 所長  
川崎 隆

### 1. はじめに

本工事は 2016 年 1 月に着工、2020 年 1 月に竣工致しましたが、その後コロナ渦に陥ったことで皆様にご紹介できないままとなっております。今回の機会を頂きましたので、施工者を代表して本工事を紹介させていただきます。

### 2. 本工場の背景

施工者として僭越ですが、本事業の背景をご紹介します。

#### (1) バングラデシュの地勢について

バングラデシュは都市国家を除くと人口密度世界一です。また国土の大部分が海拔 12m 以下の低地で、雨季には冠水するところも多く、サイクロンなどにより大きな被害も発生しています。ここではガンジス川(パドマ川)、ブラマプトラ川(ジャムナ川)という2つの世界的大河とバングラデシュ内を流れるメグナ川とが一つに集まってベンガル湾に流れ込んでおり、バングラデシュを含む一帯は世界最大のデルタ地帯となっています。そのため今後経済発展を続けていくには、多くの川により分断された国土を繋ぐ、交通インフラの整備が不可欠です。

#### (2) 交通インフラの整備(弊社施工実績)

首都ダッカ市と国内最大の貿易港を持つチッタゴン市を結ぶ国道 1 号線には、3 カ所に大河である、シタラキヤ川、メグナ川、グムティ川が流れており、かつてはフェリーで 3 回の渡河が必要でした。弊社はこの交通の要衝となる 3 カ所に道路橋を建設しています。1970 年から独立戦争による中断をはさんで、1977 年に完成したシタラキヤ橋(現カチプール橋)を始め、1991 年に完成したメグナ橋、そして 1995 年に完成したグムティ橋です。この 3 橋の完成により、国道 1 号線で結ばれるダッカ市とチッタゴン市間は、河川交通なしにつながりました。

その後、交通量増加を受けて国道 1 号線が対向 2 車線から 4 車線へ拡幅され、弊社はメグナ橋周辺の中型 5 橋梁も建設しています(2000 年)。

### 3.当プロジェクトについて

国道 1 号線のさらなる交通量増大により道路部分の拡幅が進み、ボトルネックとなっている 3 橋の拡幅・車線増設が急務となり、既存橋に隣接した新橋建設工事および既設橋の補修・改修工事が 2015 年に入札公示され、弊社 JV(大林組・清水建設・JFE エンジニアリング・IHI インフラシステムズ JV)が受注、弊社は清水建設とともに橋脚工事を担当しました。

#### 工事概要

- ・資金:JICA 有償資金協力、施主:RHD、契約:施工のみ
- ・工期;48か月(2016 年 1 月~2020 年1月)
- ・カチプール橋;橋長400m、対向4車線→8車線、内工期(新橋完成)36か月
- ・メグナ橋;橋長930m、対向2車線→6車線、内工期(新橋完成)42か月
- ・グムティ橋;橋長1410m、対向2車線→6車線、内工期(新橋完成)42か月

### 4.当プロジェクトの特色と施工状況

#### (1)プロジェクトの特色(日本で開発された建設技術)

橋の基礎となる部分に鋼管矢板井筒基礎(SPSP 基礎)及び上部鋼橋部分に細幅箱桁という、日本で開発された建設技術が採用されています。

SPSP 基礎が採用された理由は、河床の浸食対策が主です。バングラデシュの大きな河川では増水期の浸食問題が深刻であり、浸食防止の大型土嚢、玉石の大量投入などのメンテナンスを定期的に行う必要がありました。今回 SPSP 基礎を採用することで浸食リスクを大きく低減することができ、基本的に定期メンテナンスは必要がなくなります。

既設橋は、カチプール橋が完成後 40 年、メグナ橋とグムティ橋が 25 年程度経っていますが、構造的な損傷は見られません。今回の補修工事では、地震に対する補強、耐久性の向上、メンテナンスの低減化を図っています。

#### (2)プロジェクト進捗

2016 年 1 月着工後、本格工事開始の同年 7 月に悲惨なテロ事件が発生しました。プロジェクト存続が危ぶまれましたが、大使館、JICA、バングラデシュ発注者の全面的なバックアップを頂きテロ対策を構築。強固なフェンスの設置と見張り台・監視カメラを使った外部からの侵入防止対策、警察・アンサール(武装警備員)に現場内常駐いただき総勢 400 名以上による監視体制等により JV スタッフ・日系協力会社が安心して工事を進めることができました。本稿をお借りして、関係各位の皆様には本当に感謝申し上げます。

テロ対策による進捗の遅れがありましたが、ご支援に応えるべく JV 各社一致団結した努力の結果、最終的には発注者からの要望による新橋供用開始の前倒し、当初予定通りの竣工を実現できましたことをご報告させていただきます。

### 5.おわりに

当プロジェクトでは多くの日本の建設技術を導入しており、日本政府の方針「質の高いODA」の役割を十分果たせたと思います。また早期開通による渋滞の解消はバングラデシュの方々から称賛頂いているとお聞きし大変うれしく思います。ただ開通後まもなくスピードアップによる交通事故の多発、ガードレール等の多くの損傷をみるのは残念でなりません。今後も技術移転によりバングラデシュをはじめ途上国の発展に貢献していきたいと思っております。



カチプール橋建設状況(2018年6月)



メグナ橋建設状況(2018年6月)



Gumti Bridge construction status (June 2018)

### ■ 3) 会員寄稿：『就学前教育からみる Bangladesh の教育熱』

名古屋女子大学 講師  
門松 愛

#### 1. はじめに

筆者が Bangladesh を初めて訪れたのは、大学 3 年生であった 2010 年のことである。その後、就学前教育を主な対象とし、首都ダッカと北西部の近郊農村地域で、数回にわたり、フィールドワークをおこなってきた。ここでは、このフィールドワークから見てきた Bangladesh の教育熱について、就学前教育の観点から述べていきたい。なお、Bangladesh では就学前教育は小学校の一教室として提供される。公立学校では 5~6 歳が対象であるが、私立学校では 3 歳から受け入れているところが多い。

#### 2. 就学前教育の広まりと人びとの反応

まず、就学前教育の広まりから整理しておこう。Bangladesh で、就学前教育が国家の教育制度のなかに明確に位置付けられたのは、2010 年の国家教育政策 (National Education Policy) においてであった。そして、ここから 10 年ほどの間で就学前教育は急速に拡大してきている。就学前教育の粗就学率は、2000 年の 17.65% から 2018 年には 40.82% となり (UNESCO 統計)、Bangladesh 政府の統計によれば、就学前教室を有する公立学校の割合は、2010 年の 43% から 2016 年には 99.5% となった。

就学前教育の普及は、人びとの教育意識をより若い子どもにまで拡大させている。筆者がおこなった調査では、近郊農村部であっても、ほとんど全ての保護者が中期中等教育修了以上の学歴を望むとし、初等教育修了は最低条件であるとされた。そして、就学前教育は初等教育以上での学びへの準備として重要であると認識されていた。就学前教育に求められるものは知識の獲得であり、日本のように遊びが重視されることはない。教師が主導し、知識を教えているということが保護者からも教員自身からも重視されている。

一方で、就学前教育は重要であるとはしながらも、近郊農村部では、「子どもが行きたくないと言ったから、まだ行かせていない」や「一度行かせてみたが、子どもが泣いてしまうので行かせるのをやめた」という保護者も存在する。就学前教育の重要性を認識しながらも、実際に通学させるか否かは子ども次第と捉える、柔軟な教育観は残っていることが確認できる。

### 3. 「私立を選択する」という形で現れる教育熱

他方、幼い子どもへの教育熱の拡大という点で、特に人びとの教育熱が顕著に見られるのは学校選択においてである。調査対象となった近郊農村部では、人びとの教育熱は「私立を選択する」という形で現れることが多かった。筆者がインタビュー調査をしたなかで印象的であったのは、「お金があれば良い教育、なければ悪い教育」という言葉である。就学前教育に限って言えば、私立学校の就学前教室の中には、子ども達が狭い教室に並べられた机にすし詰め状態で座り、お世辞にも質が良いとは言えないものもある。さらに、教員は大学生で就学前教育の専門の知識を持たず、OJT で仕事を学んでいる状況の学校もある。一方で、無償である公立学校の方は、幼い子どもが自由に座れるように床にマットを敷くという形式で、人数も場合によっては 30 名ほどと少なかったりする。教員は教育学ではなくても学位を持っており、就学前教育専門の数日間の養成トレーニングを受けている。

このように、外部の人間からすれば、公立学校の就学前教育の方が子どもにとって良さそうな条件がある。しかし、保護者にとっては、私立学校＝質が良いというイメージがあり、「私立学校に通わせたいが、お金がないからまだ通わせることができない」と言って就学させるのを待つ保護者や、たとえ遠くても私立学校に行かせると述べる保護者、「成績が良ければそのまま私立に行きたくて欲しいが、成績が悪ければ公立学校に移る」と言う保護者など、私立学校に通わせることへの教育期待が見られるケースが多々あった。

これは富裕層に限った話ではなく、貧困層の保護者からも得られる声であり、実際に貧困層向けの私立学校も増えてきている。都市部では、さらに争いは熾烈である。私立学校は乱立し、特に英語での教授(English-Medium)の学校の人気が高い。筆者が調査した私立学校のうち高いところでは就学前教育で月 8500Tk の授業料がかかるが、このような私立学校が、子どもを集めることに苦勞している様子はなく、人びとの教育熱の高さがうかがえる。私立学校は政府の統計上は 2 万校程度とされているが、未登録の学校も多いため、実際には 6 万校以上あるともされており、人びとの教育熱に答えて学校数は増加していつていることが推測される。

### 4. おわりに

ここに記した内容は、筆者のフィールドワークから得られた情報であり、バングラデシュの教育熱の一端を示しているに過ぎない。最後に追記しておきたいのが、就学前教育における「子どもを待つ保護者」である。これは都市部でも農村部でも見られたが、保護者が子どもを学校に送った後、学校内にある待合所で教育時間が終了するまで数時間、待ち続ける様子が見られた。もちろん全ての保護者ではなく、学校によっては待つことを禁止している学校もある。交通事情によって帰るよりも待つ方が早かったりする場合もあるだろうが、数時間を犠牲にしても、幼い子どもの教育を優先している保護者の姿として印象深く残っている。教育への人びとの期待は高まっており、教育熱はより幼い子どもへと拡大している。決して質が良い学校ばかりではないバングラデシュにおいて、人びとの教育熱に学校側がいかに応えていけるかが、今後さらに注視されるところである。

※バングラデシュでは小学校の学校種は教育統計上で 16 種類に上る。本稿において、公立学校とは、政府立初等学校(Government Primary School)、新規国有化学校(Newly Nationalized Primary School)を意味し、私立学校とは KG スクール(Kindergarten)を意味する。

#### [編集部注]

バングラデシュの国民(農民)の教育に対する意識の変化を扱ったメルマガ寄稿には、日下部達也広島大学准教授『教育によるバングラデシュ農村の変化』(2019 年 6/7 月号 59 号/60 号)もありますので、ご参照頂ければと思います。

## ■4) 会員寄稿:『バングラデシュの人々にとってボンゴボンドウとは?』

## —ムジブル・ラーマン生誕 100 周年シリーズ No. 12(完)—

元理事 渡辺一弘

バングラデシュで「建国の父」と称され、今も多くの人々から敬愛されるボンゴボンドウ・シェーク・ムジブル・ロホマン。しかしその業績については評価が分かれるのもまた事実である。

日本バングラデシュ協会のメールマガジンでは、ボンゴボンドウ—ベンガルの友—の生誕 100 年にちなみ、この指導者について今年 1 月号から毎月取り上げてきたが、シリーズ最終回では、バングラデシュの有力日刊紙プロトム・アロ紙の東京特派員で日バ協会元副会長のモンズルル・ハク氏と、アメリカ・デンバー大学の教授(経済学)でボンゴボンドウに関する研究もあるハイダル・A・カーン氏へのインタビューをもとに、バングラデシュの人たちにとってボンゴボンドウはどのような存在であるのかを探る。

### 1. 独立戦争と独立直後のボンゴボンドウの役割

— バングラデシュ独立の機運が盛り上がってきた 1970 年ごろ、ベンガルの人々はボンゴボンドウをどのように見ていたのでしょうか？



モンズルル・ハク(以下 H): ボンゴボンドウは独立戦争開始前から、東パキスタンの自治権要求などの大衆運動の中心の地位を占めるようになりました。ベンガル人は彼を中心として新たな夢を描き始めたのです。ボンゴボンドウの名で呼ばれるようになったのはそのころのことです。私たち若者をふくむ東パキスタンのベンガル人には、シェーク・ムジブは解放への道の導き手と思えました。それが明確になったのが、パキスタンからの独立への意思を明確に示した 1971 年 3 月 7 日のレースコース広場での演説でした。

— ハクさん自身も解放戦士として独立闘争に参加していますが、解放戦士たちにとってボンゴボンドウはどのような存在だったのですか？

H: 独立戦争時は、ボンゴボンドウは西パキスタンで拘束されていましたが、たとえ彼が眼前にいなくとも、その存在に励まされる思いでした。実際に戦闘の指揮を執ったわけではないという声もありますが、帰還後、彼自身が目指した議会制民主主義の下でボンゴボンドウが首相になるのは極めて自然な流れでした。



ハイダル・A・カーン(以下 K): 私は、シェーク・ムジブは優れた政治能力の持ち主だったと考えています。独立前にアワミ連盟をまとめ上げ、1970 年に行われたパキスタンの総選挙でアワミ連盟を大勝に導いたのは、彼の指導力に他なりません。

### 2. ボンゴボンドウ殺害事件と背景

— 1975 年 8 月 15 日の事件についての報道をどんな思いで受け止めましたか？

H: 留学先のモスクワから夏休みで帰省してダカの自宅にいたのですが、ニュースを聞いて大きな衝撃を受けました。その少し前から、主に経済危機のために国民の支持が減少しつつあったことは事実ですが、すぐに権力の座から降りなければならぬほど支持を失っていたわけではありませんでした。

— 事件の数か月前、ムジブは大統領制と単独政党制を骨子とする政治改革を實行し、これには広い層からの批判がありましたか？

K: 「第 2 の革命」と呼ばれるその改革は、それまでの方針・政策が思ったような実を結ばなかったという判断から行われたものでした。これには身内のアワミ連盟内からでさえ反発があり、結果的に党内の一部勢力が、ムジブ政権を転覆させたクーデターを支持することになりました。しかし一方では、農業生産に向上がみられるなど、成果も生まれつつあったのです。

— 殺害事件は軍の一部若手将校らによるもので、軍の組織的な関与はなかったともいわれますが…

H: 直接的な関与はなかったとしても、軍の内部に、特に旧パキスタン軍に属し、独立後帰還してバングラデシュ軍に組み込まれた軍人の間には、不満がたまっていたことは確かです。独立戦争を戦った解放軍戦士と比べ、昇進面などで冷遇されているという思いが彼らにはありました。こうした軍人たちはまた、バングラデシュ独立を必ずしも支持していたわけではありません。新生バングラデシュ軍編成にあたっては、旧パキスタン軍人の選別も行われましたが、ムジブの判断で親パ



キスタン派の人間が軍の幹部となったケースもありました。のちに軍政を行った H.M.エルシャドもその一人です。これはムジブの犯した失策で、国の将来に影響を及ぼす結果になったと私は考えています。

### 3. ボンゴボンドウの人気と人柄

— 没後 45 年を過ぎてもボンゴボンドウの人気は衰えていませんが、その理由は？

H: まず国の独立への大きな貢献ということです。私たちバングラデシュ人は独立のために戦い、目的を達成しましたが、ムジブの存在なしにはなしえなかったことです。

K: その人柄も人気の要因です。首相府を誰でも訪れ、ボンゴボンドウに直接会って訴えることができたのは有名な話です。気取ったところがなく、一度会った人のことは決して忘れないなど、人を惹きつける人物でした。国民を上から見下ろすのではなく、同じ高さから接していました。

H: その通りです。私は当時ある学生組織に属していて、国の記念日に行われる集会で組織の機関誌を販売しようと思えば、たまたまそこにボンゴボンドウがやってきました。機関誌を差し出したら代金は？と聞かれました。贈呈するというと、私も学生時代このような雑誌を発行していて、制作費に苦勞した経験があるから、と販価の 10 倍ほどのお金をくれたのです。私たちのグループはアワミ連盟傘下の学生組織でなかったにもかかわらずです。そのように普通の人々の視点を備えたリーダーでした。

### 4. ボンゴボンドウの業績評価

— ボンゴボンドウについては、アワミ連盟が政権にある現在は小学校の教科書から取り上げられて、子どもたちも自然と学習するようになっていますが、過去にはアワミ連盟以外が政権を握った時期もありました。そのころにはボンゴボンドウについて国民はどう知らされていたのでしょうか。

H: 実は 1975 年の殺害事件から、1990 年エルシャド大統領の政権が倒れるまで続いた、実質的な軍事体制下では、ボンゴボンドウの業績は全面的に否定されていました。1990 年の民主化のあとで可能になったことのひとつが、1971 年 3 月のレースコース広場での演説の公開でした。この演説に接することで独立の意義を認識し、ボンゴボンドウの存在意義を知った層も多かったのです。

(注: この演説の日本語訳は [http://www.el.tufs.ac.jp/media/news\\_j.html](http://www.el.tufs.ac.jp/media/news_j.html) (東京外国語大学の「日本語で読む南アジアのメディア」) → 国際新着ニュース → 2017 年 11 月 2 日付「3 月 7 日の忘れ得ぬ演説」に掲載されています。また、1971 年 3 月 7 日のボンゴボンドウの演説は <https://www.youtube.com/watch?v=ZsQfqlkayJ4> で視聴できます。)

— ボンゴボンドウの業績について客観的な分析が行われていない印象を受けますが…

H: 人間である以上、だれも無謬ではありえません。ボンゴボンドウも成功の一方、いくつかの失策も行っています。しかしこれまでは、彼の業績を全肯定するか全否定するか、どちらかの評価しか行われてきませんでした。

K: 確かにボンゴボンドウの成功と失敗を総合的な視点から分析・評価することはまだ行われていません。それには二つの理由があって、一つは彼の評価には政治的な思惑が常に絡んでくること、そしてもう一つは資料と情報の不足です。しかし 2 番目についてはダカにできた独立戦争博物館などを中心に資料の収集や分析が進められ、学術的な研究も国内外で進められるようになってきています。そうした動きをさらに推進する必要があります。

## ■5) 理事連載:『バングラデシュの独立に寄りそう(1970 年 12 月):

パキスタン総選挙と中国をめぐる動き』ーバングラデシュ独立・国交 50 周年記念シリーズ No. 6ー

理事 太田清和

## 1. ヤヒアの使命: 民政移管(Legal Framework Order 方式)

(1) アユブの軍事独裁はパキスタンに繁栄をもたらしたが、貧富の格差と東西の格差を深めた。69 年、学生、労働者、農民達による既得権益を享受する支配層(パンジャブの軍部とカラチの財閥)に対する反政府運動が高まり、政治的混乱が広まった。与野党対話で、与党側は普通選挙、連邦制を提示したが、野党側との合意が得られず、事態を打開する目途が立たなかった。69 年 3 月、アユブは「軍部のみがパキスタンの安全保障と国家の一体性を護り得る。軍部はパキスタンを分裂から救わなくてはならない」とのメッセージを託して、ヤヒアに全権を委譲した。

(2) ヤヒアは、①戒厳令(ムチ)を敷くとともに、②民政移管(アメ)を約束し、民政移管までの暫定政権であるとして、事態を収拾した。

ヤヒアにとって民政移管が『使命』となった。民政移管は、軍部(パンジャブ)と財閥(カラチ)の既得権益を掘り崩しかねない。軍部と財閥は、ヤヒアの政権基盤でもある。

ヤヒアは、69 年 11 月、①一人一票制による普通選挙、②70 年 1 月より政治活動の復活、③70 年 10 月総選挙の実施を発表した。そして選挙、議会、憲法など民政移管のために法的枠組(Legal Framework Order(以下 LFO))を策定することを明らかにした。

(3) ヤヒアは、側近わずか数名のチームにより、極秘裏に LFO の起草を進めた。骨格が固まったところで、法務省で法的形式を整え、閣議で決定、3 月に大統領令として発布した。ムジブルとブットには、策定過程で内々の打診と調整を怠らなかつた。

LFO には、①連邦国家の独立と一体性を堅持する(20 条)、②議会が 120 日以内に新憲法案を議決できない場合は解散する(24 条)、③大統領が新憲法案に拒否権を持つ(25 条)、と定められており、軍部の意に沿わない憲法/政体を許さない仕掛けが施されていた。なお最大の焦点である自治権については、取扱いが微妙なため、あえて曖昧なままとした。

(4) 東パのバシャーニ派はじめ多くの政党は、「軍部体制の枠組内の政体変更に過ぎない。自治権の確約がなければ選挙には応じない」とボイコットの動きを示した。

ムジブルは「まず選挙戦を通じ、アワミ連盟を組織力と規律ある政党として鍛え上げ、選挙で民意を獲得するのが先決である。民意の裏付けを得て正統性を確保しないことには、ヤヒア軍事政権と交渉で渡り合うことはできない」との考えから、LFO の下であっても、選挙を強く望んだ。

ブットは個人として LFO に留保はあったが、西パの政治家達は、西パの既得権益が護られる見通しである以上、LFO には関心はなく、自分達の選挙戦に熱中していた。

(5) LFO は、民政移管の形式は取りつつも、軍部が実権を掌握し続けようとする腐心の労作であった。ヤヒアは、「パキスタンは百家争鳴の政治社会。小党が乱立してまとまることはない。民政に移管しても、結局は軍部が各政党の間を調整する外はなく、実質的権限/既得権益を維持することが出来る」と踏んでいた。軍部は、本来民政移管に反対の立場であり、LFO 策定にも殆ど関わっていなかっただけに、ヤヒアの民政移管の進め方には不満と不安が広がっていた。ムジブルが 6 項目綱領を掲げ、東パで政治的うねりを巻き起こしていることに焦燥感を募らせていた。

12 月 3 日、ヤヒアは TV ラジオ放送で、国民に総選挙への参加を呼びかけながら、総選挙が LFO の大統領令の枠組下であると強調することも忘れなかった。とはいえ画面に登場したヤヒアは非常に痩せ、疲れが目立ち、軍部内の反対論が如何に強いものであるかを窺わせていた。

## 2. 総選挙の結果

12 月 7 日、パキスタンで史上初めての普通選挙が、自由かつ公正、平穏裏に行われた。

(1) 選挙の結果が明らかになると、全パキスタンが驚いた。

ヤヒアは、「一体、何ということが起こっているのか?」と叫んだ。

アワミ連盟は、全 300 議席のうち東パ 160 議席を獲得し、過半数を制した。またブット率いる人民党は、西パ 138 議席のうち 81 議席を獲得した。イスラム系、軍部系、財閥系の政党は振るわなかった。

(2) 東パでは、バシャーニ派はじめ多くの政党が、ヤヒア政権の LFO に不満を持っていたところへ、サイクロン/高潮への対

応振りが決定打となって、選挙ポイコットの拳に出た。

その結果、アワミ連盟が東パの期待を一身に担うこととなり、地滑りの勝利につながった。ムジブル自身、「犠牲となった方々には申し訳ないが、サイクロンのために圧勝することが出来た」と振り返っている。

ブットはポピュリスト。軍部/財閥の既成勢力を鋭く批判、社会主義を標榜する革新政党として、学生、若者、大衆の間で支持を広く伸ばした。他方、ブットは野心家でもあり、パンジャブ、シンドで多数の議席を獲得し、軍部、財閥の一部とも手を結んでいた。

(3)アワミ連盟は東パで圧勝したものの、西パで1議席も得られず、人民党は西パで票を伸ばしたものの、東パで1議席も得られなかった。選挙結果は東西分断を明らかにした。イスラム教はもはや統一原理ではなく、東西をつなぐ政党/政治勢力が無くなってしまったのである。軍部とすれば、パキスタンの国家の一体性を担保するのは自分達であるとの思いを強めたであろう。ムジブルにとっては、新憲法制定の交渉に強い立場で臨むことが出来ることとなった。

### 3. 中国をめぐる国際社会の潮流

(1)1970年、人口8億人を擁する中国ではなく、台湾を実効支配するに過ぎない国民政府が、国連で中国を代表し、安保理の常任理事国であることの不自然さは、いよいよ明らかとなった。

1960年代にアフリカをはじめとする植民地が独立すると、国際社会で第三世界の勢力が伸び、半植民地主義/反帝国主義を標榜する中国への支持も広まった。70年11月に訪中したヤヒアは周恩来に対し、中国の国連加盟の支持を表明している。

中国支持は、途上国にとどまらず、70年10月にカナダが、同11月にはイタリアが、中国と国交を樹立した。こうした状況下で行われた、70年11月の中国の国連代表権の表決では、アルバニア案(中国加盟、国府追放)が初めて賛成51票と、反対49票を上回った。日米等共同提案の重要事項指定法案(重要事項の決定のためには2/3の票決が必要)の可決で、現状を維持したものの、中国の国連加盟の動きは、もはや動かしがたい潮流であることが明らかとなった。

(2)またニクソン米政権が、ベトナム戦争の泥沼から脱し、対ソ交渉の立場を強化するべく、69年に中国政策を見直し、対話のシグナルを中国に送り始めたことも、この流れを促進していた。

70年10月25日ニクソンはヤヒアに中国との橋渡しを依頼し、ヤヒアは11月中旬訪中した。12月9日になって待望の回答がキッシンジャーに届いた。ヒラリ駐米パキスタン大使は、「台湾と呼ばれる中国領土を明け渡す問題を討議するため、ニクソン大統領の特使の北京訪問は大いに歓迎されよう。これは、毛沢東、林彪の意見でもある」という周恩来のニクソン宛のメッセージを伝達した。キッシンジャーはニクソンと協議の上、12月16日にヒラリ大使に対し、米国は北京でハイレベルの会談に臨む用意があるとして、「交渉の議題は、台湾問題を含め中国と米国との間に存在する広範な問題とする」との回答メモを手交した。

### 4. 日中関係の展開

戦後日中貿易は、「政経分離」と「政経不可分」という2原則の間を揺れつつ進められてきた。60年代に入ると、松村謙三、高碓達之助など、自民党内の親中派の議員が、贖罪感もあって日中関係の改善に熱意を燃やした。親中派議員がLT貿易、覚書貿易などの枠組を作ったことで、日中貿易は大きく伸長し、日本は1965年以降中国の最大の貿易相手国となった。他方、中国は、年毎の覚書貿易交渉で、佐藤政権の政策批判の文言を盛込もうと粘り強く迫った。特に1969年11月の日米共同声明(沖縄返還を決めると共に韓国台湾条項を明記)に、中国は強く反発し、70年4月、中国貿易に携わる日本企業に『周4条件(台湾と取引する企業を排除するなど)』を提示した。当初は対中貿易の依存が大きい企業が応じていただけであったが、秋以降になると多くの有力企業が『周4条件』受入れへと動き出し、経済界に対中傾斜の流れが出て来た。

また64年、親中派議員は日中間で記者交換の覚書をまとめ、日本のプレス9社より記者9名が派遣された。しかし中国側は、文化大革命を挟んで、非友好的な報道を行うプレスの記者を次から次へと追放し、1970年には朝日新聞1社のみとなった。この結果、日本のメディアは、構造的に、対中批判を抑制し、日中友好を盛り上げる論調が強まったとされる。こうして中国は、覚書貿易とメディアへの「工作」を通じて、日本国民の対中贖罪感に訴え、親中感情を醸成して、佐藤政権の対中政策を切り崩そうとした。そして政界でも、12月9日、藤山愛一郎を会長とする超党派の日中国交回復議員連盟が結成され、国会議員の過半数を上回る379名がメンバーとして名を連ねるに至った。

**■6)『事務連絡』**

○協会行事・講演会等記録動画の開示： ホームページの会員向けメニューで順次会員の皆様に公開してまいります。  
詳細は近々改めてご案内致します。

○会員情報変更届のお願い： 事務局では会員各位の連絡先等の最新版を常備する必要がありますので、皆様の住所変更、メールアドレスが変更されました場合は今後は <jimukyoku@japan-bangladesh.org> までお知らせ下さるようお願い致します。

○本協会の活動などについてご意見等ありましたら、お知らせください。また、メール・マガジンに載せたいご意見、情報、その他昔のバングラデシュ勤務時代の思い出などお寄せ下さい。宛先： jimukyoku@japan-bangladesh.org（約1500字。体裁上若干の修正あり得ることご了承下さい。）

=====

一般社団法人 日本バングラデシュ協会

<http://www.japan-bangladesh.org/>